



第 1 8 号
平成 27 年 8 月 25 日
岩手県長寿社会課

みんなの力で、育つ育てる地域の芽
「老人クラブがけん引する!?
自治会活動と介護予防」の巻（遠野市）

現在、国を挙げてその推進に力を入れている地域包括ケアシステムの構築。「誰もが、住み慣れた地域で、いつまでも、その人らしく暮らすことのできるまちづくり」はどうしたらできるのか。少し立ち止まって、考えるきっかけが『遠野』にありました。それでは、ずさまと、ばさまと、わらすっこが織りなす『新しい昔話』のはじまりはじまり…

～「介護予防に資する住民運営の通いの場」の1か所当たり参加者数「200人」～

とある日の編集部。国の「介護予防事業実施状況調査」の市町村調査票をペラペラと眺めていたとき、遠野市の調査票に書かれたひとときわ大きな数字が目飛び込んできました。どこも、どんなに多くてもせいぜい4、50人なのはどうしてここだけ？
その正体を求めて、遠野市の中心街にある『遠野町第13区自治会』へ向かった取材班は、きれいに除雪された大きな自治会館で開催される同自治会の『農園部総会』へ出席することとなったのでした。

「遠野町第13区自治会の構成と主な活動」



遠野町第13区は、遠野市の人口の約5.8%（平成26年12月末現在）に当たる方が生活する市内最大の行政区です。新興住宅地であり、アパートも多く、遠野市にありながら、都市型コミュニティの地域でもあります。
そして、この遠野町第13区の自治を一手に引き受けるのが、今回訪問する「遠野町第13区自治会」であり、自治会によるさまざまなコミュニティ活動が行われています。
中でも、活動の中心となるのが、平成15年から行われている三世代交流の『ふれあい農園事業』。

この農園は、当時、小学校が週休2日制へ移行したのをきっかけに、「休みになった土曜日に子ども達が集える場所」として始められました。
平成20年度からは、「高齢者世帯又は日中において家族が不在となる世帯に属する高齢者に集いの場を提供する」サロン活動として、遠野市社会福祉協議会が実施する「ふれあい・いきいきサロン事業」の認定も受けています。



遠野町第13区自治会・農園部総会

平成27年2月12日。この日、遠野町第13区自治会の農園部が来年度に向けた事業計画案を策定する総会が開催されました。

当初、取材を申し込んだところ、近々、農園部の総会を開くとのことで、こちらの都合に合わせて開催日を選んでいただいたことに、まず感謝です。

約束の時間に開催場所の自治会館にうかがうと、そこにはすでに役員さんたちが集まっていました。その数、総勢22人！

会の結束力がうかがわれます。



菊池農園部長（左） 多田会長（右）

はじめに、今回の取材を快く受け入れていただいた自治会長の多田さんと農園部長の菊池さんの御挨拶があり、総会は始まりました。

今回の取材を機に、『ふれあい農園』のこれまでの活動を振り返っていただいたとのことで、平成15年からの取組について、菊池農園部長から丁寧な御説明をいただきました。

平成26年度は、ジャガイモ、サツマイモ、大豆、ニンニク、大根など、10種類の野菜を作

付けし、主な収穫はジャガイモ500kg、サツマイモ1,000kgなどなど。

そして、議題は来年度の事業計画へ移ります。

【平成27年度「ふれあい農園」事業計画（案）の検討】

① 事業目的について

「ふれあい農園を活用して、高齢者世帯等に集いの場（憩いの場）を提供すると共に、世代間交流の推進等、児童・生徒の健全育成活動並びに東日本大震災被災者（3区仮設住宅入居者）との交流を図る場として幅広く事業展開を図る。」との事業目的がまず確認されます。

『ふれあい農園』が「高齢者」が集う「場」、
「世代」が交流する「場」、

そしてさらに、今は「地域と震災で被災された方」が交流する「場」として重要な役割を持っていることがわかります。



② 活動内容について

次に、活動内容に関する意見が自由に発言されました。

- ・収穫祭は楽しいが、炎天下の草取りは辛い（女性役員）
- ・作業は大変だが、出てくると人のために役立つ（女性役員）
- ・一反歩は今では広く感じる。作付け面積を少なくしては。
- ・13区の男の料理教室で減塩に取り組んでいるが、その教室や13区の行事に食材を提供してもらって助かっている。（食生活改善推進員）

すると、見るからにこの会で重きをなしていると思われる男性が、われわれ取材班のすぐ横で発言。

その方は、遠野町第13区内の**老人クラブ「早瀬清流会」**会長の藤田さんです。

藤田さんは、「自治会の活動に対しては、これまで老人クラブとして協力してきたが、今、会員の平均年齢は79歳、来年は80歳になる。そして、農園活動もいつも決まった人しか出てこない。何とかしなければ、このままでは『ふれあい農園』は続けられない。」と訴えました。



老人クラブ「早瀬清流会」の藤田会長

老人クラブは、現在会員数96人。今日出席している役員さんも70%以上がメンバーだそうです。

少しかわってきました。どうやら遠野町第13区自治会を支えているのは老人クラブのようです。新興住宅地であるここ遠野町にさまざまな地域から集まった団塊の世代の住民達を中心となって、地域をつくってきたのでしょ。

そして今、老人クラブの会員の高齢化に伴い、事業が停滞するのではないかという危機感の中、「何とかしなければ」という皆さんの想いが伝わってくるのでした。

『事業を続けるためには、みんなで意見を出し合って、協力し合わなければ。(藤田会長)』



【県長寿社会課との懇談の時間～今回特別に時間を作っていただきました～】



そして、いよいよ「総会次第」にまで加えていただいた取材対応です。
まずは、最初から気になっていたこと、「なぜ、農業が盛んな地域であえて『ふれあい農園』なのか」からお話を伺いました。

——農業が盛んな地域であえて「農園」を選んだ理由を教えてください。

遠野町第13区自治会は、昭和39年に結成され、今年50周年を迎えます。もともとサラリーマン家庭が多い新興住宅地であったため、農業は新鮮な体験でした。そうした地域環境の中から、子ども達、地区PTA、老人クラブが一体となって『ふれあい農園』が誕生しました。

アパートも多く、年々、人口が増加するこの地域にあって、『ふれあい農園』は、地域コミュニティの形成にも大きく貢献しています。

——「ふれあい農園」の活動を続けてこれた原動力はなんですか。

「子ども達の居場所づくりを」との市からの要請を受けて、当時の区長の「わらさあどを集めて草取りでも一緒にしましょう！」との発案から始まったものですが、**老人クラブの協力が大きな力**になっています。また、協力することで、老人クラブにも、よい効果がたくさんあります。

- 子ども達との交流が生きがいにつながる
- お互いに声かけがしやすい、集まりやすい関係が築ける
- 体調が悪い人がいれば、気にかける、目を配ることができる



——「ふれあい農園」の活動の楽しみはなんですか。

- 子ども達や住民に有機肥料を使った安全な農作物を提供することができる
- 農園でできた作物の収穫祭を三世代交流しながら祝うのが楽しみ
- 地区の行事やお祭、健康教室の食材にも提供され、役立っている

—「ふれあい農園」の活動の際の苦勞を教えてください。

時代が変わり、子ども達やPTAの参加が難しくなっています。また、これまで活動の原動力となってきた「老人クラブ」のメンバーの高齢化が進み、体力的にきつと感じる人が増えてきました。

ここまでお話を伺って、最後に少し意地悪な質問をしてみました。

—もし、ふれあい農園の活動をやめることになったら…どのように思いますか。

- ・ 困る。作業は大変だけれど、農園に出たときの「人のために役立っている」という喜びには代えられない
- ・ ダメダー、農園部の活動は第13区の核になっているから
- ・ 農園を維持していくのは大変には大変。しかし、農園活動は健康によいし、介護予防につながると思う
- ・ 活動をやめたらみんなでおしゃべりする機会もなくなる。集いの場になっているから、やめてはいけない

今までの質問には、ひと呼吸置いてから返事が返ってきていたのですが、この質問だけは、次々に返事が返ってきました。思ったとおり、皆さん、この農園活動の意味をしっかりとわかっていて、その上で大切にしているのです。

皆さん、ありがとうございました。



【遠野市遠野地区センター所長の奥寺さんに聞く】

この日は、市民に身近な地域活動を支える遠野市役所遠野地区センターの奥寺所長も出席されていました。

奥寺所長に、遠野町第13区の印象を伺いました。

遠野市内で一番活発に活動をしている自治会です。組織がしっかりしていて、なにより地域住民に対する広報活動が素晴らしいと思います。

また、活動している皆さんが自分達の意見をしっかりとっており、話を聞くと、とても参考になる建設的な意見をいただけます。

遠野市では、ここで出される自治会活動の問題点は、イコール市全体の問題であると受け止めています。



遠野地区センター 奥寺所長

インタビュー



遠野町第13区自治会は、**豊かで活力ある地域社会づくり活動を行っている自治会**として、高い評価を受けています。その自治会をまとめられている、自治会長の多田共文氏にお話を伺います。

——遠野町第13区自治会の運営に当たり、大切にしていることを教えてください。

当自治会では、役員会を毎月開催しています。自治会の行事は役員会で決定して実施しますが、行事が終わった後、その実施結果を次の役員会に諮り、その際の意見を次回の計画に活かすようにしています。

同じように、住民の皆さんには、自治会が今何を、どのように行おうとしているのかを「自治会だより」や「ページング放送」で事前にお知らせし、その実施結果もあわせてお知らせしています。

役員はもとより、**すべての住民に自治会活動が見えるように配慮**することで、結束力が高まっていくのではないかと考えています。

——情報発信の方法やその効果について、もう少し詳しく教えてください。

「自治会だより」では、行事の開催案内を行うほか、行事を開催した後に、行事に参加した参加者の感想を掲載しています。また、時宜にかなった課題・話題等を掲載し、「双方向コミュニケーションによる住民とのよい関係づくり」を基本にして編集しています。

参加者の感想を載せることでその人の顔が見え、住民同士、親近感が生まれて良好なコミュニケーションが図られています。(A4 版両面印刷で月2回発行)

また、「自治会だより」の紙面だけでは情報が伝わりきらないこともあるため、行政区内に限定してアナウンスができるページング放送(区内加入率 61%)と防災行政無線の2種類のメディアをあわせて活用しています。

その結果、「自治会だよりは見ていたが忘れていた。」「放送を聞いて、近所誘い合って参加した。」など、**自治会行事の参加率の向上**に役立っています。



——自治会活動を通じた介護予防への取組について教えてください。

当自治会では、「ふれあい農園」（農園部担当）のほか、「早瀬清流会」（老人クラブ）、一人暮らし老人交流会（福祉部担当）などでさまざまな行事を開催し、特に**高齢者世帯や独居老人が気軽に取り組み、主体的に参加できる居場所づくり・出番づくり**をしています。

活動的な高齢者には、グラウンドゴルフ、ゲートボール、ペタンクなどのスポーツクラブや吟詠会、麻雀、囲碁、将棋などの文化会が催されています。

一人暮らし老人交流会では、民生委員が中心となり、身体の不自由な方でも気軽に参加できるようにサポートをしながら、日帰り温泉旅行を毎年行っています。

これらの行事や活動は、ときおりケーブルテレビなどでも取り上げられ、住民からも好評をいただいています。



年末行事の餅つき



グラウンドゴルフ交流会

また、例年行っている『ふれあい農園』の収穫感謝祭は、親子孫の三世代交流のほか、東日本大震災津波発生以後は、遠野市内に設置された応急仮設住宅に住む被災者の方々との交流の場として、最近では100人以上の参加者を集めています。

震災の関係では、応急仮設住宅の方々との交流のほか、遠く県外から沿岸被災地の支援に向かうボランティア団体へ自治会館を宿泊所として提供する活動も行い、こうした活動の成果として、住民に一体感が生まれています。

そして、この沿岸被災地復興への活動が評価され、平成24年度の「**地域づくり総務大臣表彰**」も受賞しました。



農園部総会を後に、「ちょボラ」へ

『ふれあい農園』の活動を説明するためには、もう一つ訪ねなければならない所がありました。『ふれあい農園』は、地域の高齢者（一人暮らし老人等）や障害のある人も含め、普段なかなか外出することのできない人が定期的に地域で集まり、茶話会や食事会、行事などを通じて、交流を深め、仲間づくりをする「ふれあい・いきいきサロン」として、遠野市社会福祉協議会の助成を受けています。

ふれあい・いきいきサロン事業を推進する「ボランティア・市民交流サロン『ちょボラ』」へ事業の内容をうかがいに向かいました。

インタビュー

ボランティア・市民交流サロンの愛称「ちょボラ」には、自分にもできること、関心のあることから気軽に「ちょっとボランティアを始めよう」という意味が込められています。

所長の高橋洋子さんにお話を伺いました。



——ふれあい・いきいきサロンについて教えてください。

遠野市のふれあい・いきいきサロンは、現在 30 か所あり、老人クラブが母体となって高齢者が自主的に集まっていたり、自治会が主体となって地域役員さんがリーダーを務めたりと、さまざまな形で運営されています。

最近、市の**介護予防教室で教わった運動を継続したいという人達が集まったサロン**ができました。週 1 回活動しています。

また、つるし雛や小物作りなどの手仕事を中心としたサロンや、自分たちで昼食を作って毎月誕生会を開いているサロンもあります。地域の「若いおばあちゃん」達が 80~90 歳代の「おっかいおばあちゃん」のお世話を一緒に楽しんでいるサロンや、昔ながらの「かまど」でご飯を炊いて、保育園の子ども達と食事会を開くサロンなど、**遠野ならではのサロン**もあります。

——ふれあい・いきいきサロンの今後の課題について教えてください。

地域のニーズを拾い上げて、そのニーズをインフォーマルなサービスにつなげていくためのマッチングとサービスの組み立てが円滑にできるようにしていきたいと思っています。

また、サロンへ参加することが直接介護予防につながるよう、サロンの活動メニューの中に**体操を取り入れる工夫**もしていきたいです。

ただ集まるだけではなく、健康な身体への意識づけにつながればと期待しています。



取材を終えて…

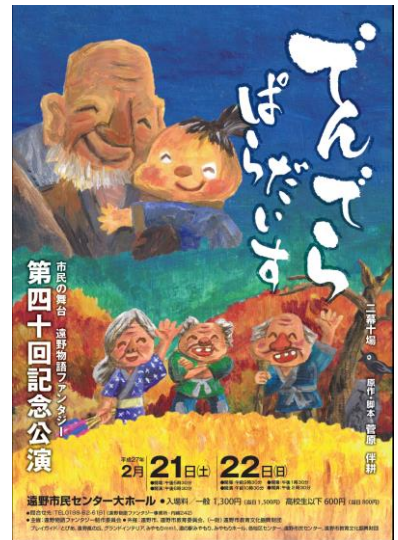
取材の日から9日過ぎた2月21日。市民の舞台『遠野物語ファンタジー』を観に、遠野へ行きました。今年は、この市民劇が始まって40回目を数える記念公演ということでしたが、その記念の演題は、なんと『**でんでらばらだいす**』。

かつて遠野の老人達が口減らしのために自ら山へ上がり、そこで余命を果てたという昔話にある姥捨て山「でんでら野」に、なぜか「ばらだいす」の文字。舞台では、山に上がった老人達が**自分の特技やできることを精いっぱいやり、みんなで助け合いながら豊かに生きる姿**が描かれていました。

いました、いました。舞台の上で遠野町第13区の農園部長、菊池さんが釣竿を持ちながら、「ボケ老人」をユーモラスに演じています。

舞台を見ていたら、目の前にいる菊池さんはもとより、農園部総会でお会いした皆さんの顔が次々に浮かんできました。「ああ、あの人たちも、この舞台の老人達のように自分の特技を活かし、できることをやりながら『**ふれあい農園**』というパラダイスをつくっているんだなあ…」そう思ったとき、なんだかもう、介護予防とか、自主活動とか、そんなものは私達「制度」や「役人」が後からやってきて勝手にあてはめたもので、「なに肩肘張ってるんだあ。おれたちは、ただ、わらすの喜ぶ顔みでえだけだあ。」と笑われているようで、ひどく恥ずかしくなったのです。地域包括ケアシステムとは、何かをつくり上げるものではない。今ある何かを見出し、それを伸び伸びと、豊かに育てていくものではないかと、あらためて思うのです。どんとはれ。

(文脈の都合上、「認知症高齢者」を「ボケ老人」と表現させていただいたことをおことわりし、お詫び申し上げます。)



(なんでも取材班 「に」)

地域包括ケアシステムの重要な部分を構成する地域住民の自主活動。実際の活動を拝見するため、期待に胸を躍らせて遠野へ向かいました。遠野町第13区自治会農園部総会に集まった皆さんが、目指す方向へひとつとなつて、建設的な意見を交換する姿に頭が下がる思いでした。そして、さらによいなと感じたことは、**影で支えている方々への感謝を忘れない皆さんの気持ち、「あの方の影の力のおかげです。」**という声がお互いに聞かれたことです。素敵の方々に会うことができました。

遠野町第13区自治会を御紹介くださった遠野市長寿課の磯谷課長補佐さん。急な訪問依頼にも格別の御対応を賜った自治会長さん、「ちょボラ」の所長さんに感謝申し上げます。

(なんでも取材班 「つ」)

「ちいきで包む」は、岩手県内市町村の地域包括ケアシステム構築をアシストするため、各地の特色ある取組や、関係する情報を発信する情報紙です。

企画・発行 (問合せ先)

岩手県保健福祉部長寿社会課 (本号担当: 西川 妻田 (前任))

TEL: 019-629-5432 FAX: 019-629-5439 E-mail: AD0005@pref.iwate.jp